

山田孝君の墓参にあたって

2019年9月22日 高原浩之



今日の墓参は、私がお願いしました。尽力していただいた渡邊君と、許していただいた原田さんに、深く感謝します。赤軍派の政治局員として、連合赤軍事件の根本的な責任があると認めて謝罪したい。

こういう気持ちです。

以前にも、原田さんを訪ね、山田君の墓に参りました。しかし、指導者としての謝罪はできませんでした。

自分も遺族であるという気持ちが先に出てしまいました。

人民に依拠していなかった、革命の原動力であるプロレタリア階級の階級闘争を組織できなかった、革命情勢ではなかった、小ブルジョア急進主義であった、大衆と結合しなくてはならない、などなど、このような反省は、ブンドと新左翼の全体にも通じます。

多くの人びとによって、今日の人民闘争の中にしっかり生かされていると思います。

しかし、連合赤軍事件を、弱い兵士に無理に「統括」を求めて「リンチ」して殺してしまったというように見るなら、反省としては全く不十分です。はっきり言えば嘘でしょう。

赤軍派が結成の時に起こした<7・6>事件に大きな原因がありました。

武装蜂起方針への支持が広がらず、第二次ブンドの党内闘争で孤立し、赤軍派内部に動揺が拡大しそうでした。ここで、赤軍派指導部は、「内ゲバ」を実行した。

下部を動員し組織を維持するという意図であったため、「内ゲバ」を超え、「リンチ」まで実行してしまった。型通りには自己批判しました。しかし、指導部の組織維持の意図が最大の動因で「リンチ」してしまったという核心は隠した。それが連合赤軍で巨大に増殖してしまいました。

連合赤軍は、人民に依拠しない武装闘争が破綻し、もっと追い詰められた状況にありました。組織を維持するという意図は、指導者が自分の地位を維持するという意図にまで進んでしまった。組織と自分の地位を維持しようと、次々と誰かを「総括」にかけ「リンチ」し続けた。

「あさま山荘銃撃戦」は「総括」があったからではなく、「総括」から解放されたから、できた。

これが実際でしょう。

赤軍派指導部が〈7・6〉を真に反省しなかった。そのために連合赤軍事件は起きた。大変に後悔しています。贖罪の気持ちでいっぱいです。「内ゲバ」はいけない。「リンチ」は質を違えてもつとけない。第2次ブンドにはもともと第7回大会で「内ゲバ」と「リンチ」があった。新左翼には「対革マル戦争」がある。そもそも国際共産主義運動には、ソ連の「大粛清」以来、支配体制維持のため、「粛清」がずっと存在し続けています。

ソ連の変質に続く中国の変質。社会主義・共産主義とマルクス・レーニン主義は根本から考え直し出発し直さなくてはなりません。それと、同じように、「粛清」を、「内ゲバ」と「リンチ」を清算しないと革命運動を立て直すことはできないでしょう。

昨年の「塩見孝也お別れ会」の後、もう50年も前のことだが、赤軍派をきちんと総括しようという機運があります。赤軍派の政治局員が連合赤軍事件の根本責任を認めて謝罪する。これは革命運動が立ち直って前進するのに、それなりの意味はあると考えます。

今日はその機会の一つになりました。ありがとうございました。(おわり)